

# 発達障害児への余暇支援と保護者への子育て支援の取り組み

伊藤信寿<sup>\*,1)</sup>、真鍋智美<sup>2)</sup>、白瀧いずみ<sup>2)</sup>、長谷美智代<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup>聖隷クリストファー大学、<sup>2)</sup>根洗学園、<sup>3)</sup> 合同会社 MiMo チルコロ

## 1. 目的

浜松市の第3期浜松市障害福祉計画の中で、平成26年度の児童福祉法に規定するサービス全体の見込み量を算出している。そこには、全体的に年々増加傾向にあり、平成24年から平成26年の予測をみると、障害児相談支援件数524.1%、児童発達支援126.5%、放課後等児童デイサービス104.7%、保育所等訪問支援事業230%の増加率を見込んでいる。しかし、浜松市における発達障害児への支援は、専門機関が少なく、特に児童期から青年期での支援方法は確立されておらず、その対応は緊急な課題である。実際に浜松市在中の発達障害児の母親は、幼少期においては支援が比較的多くあるが、就学期以降は支援がなく、困っているということを多く訴えている。このように発達障害児あるいは、グレーゾーンの子どもに対する量と質における支援の不足により、孤独な保護者、関わりが薄い親子関係等の課題に対する取り組み、地域社会が子どもを取り巻く支援に関心や理解を深め、地域が協働しながら、支えていくことが必要と考える。

そのため、今回の研究は、まず浜松市の発達障害児の子育てにおける家庭のニーズや課題を検証することを目的とする。さらには、広範囲な年齢層の子どもたちを地域で支える子育て支援システムを構築し、定着させることを今後の検討課題とする。

## 2. 方法

### 1) 対象

A 発達支援センターを卒園した小学生8名。

### 2) 募集方法

A 発達支援センターを卒園し、在園中に作業療法士による感覚統合療法（以下SI）に基づいた集団作業療法に参加した子どもの家庭に、センターより余暇支援活動参加の案内と希望申請を送付。8名から参加希望があり、発達障害をもった小学生8名に対し、余暇支援活動を実施した。そのうち同意が得られ8名について分析した。

### 3) 倫理的配慮

対象者の保護者に対し研究内容と、研究協力の同意が得られない場合も余暇支援活動を受けられることを説明し、全員から署名にて同意を得た。

### 4) 余暇支援活動の内容

期間：夏休み 2014年8月19日、20日、21日の3日間。

時間は10時から17時までであるが、参加時間は各家庭で自由とした。

場所：中区にある倉庫を借り、SIで使用する遊具を設定した。



図1 お借りした倉庫



図2 遊具等を使用した遊びに挑戦



図3 みんなで昼食作り

活動内容：表1

活動には子どものみが参加した。子どもの送迎は保護者をお願いした。

表1 余暇支援活動の内容

	8/19	8/20	8/21
午前	SIを基盤とした遊び 昼食の食材の買い物 昼食作り	SIを基盤とした遊び 昼食の食材の買い物 昼食作り	SIを基盤とした遊び 昼食の食材の買い物 昼食作り
昼	昼食（流しそうめん）	昼食（ハンバーグ）	昼食（うどん）
午後	おやつづくり（かき氷） ウオータースライダー 水遊び（ビニールプール） 自由	おやつづくり（白玉） ウオータースライダー 水遊び（ビニールプール） 自由	おやつづくり（ホットケーキ） ウオータースライダー 水遊び（ビニールプール） 自由

5) SIとは

自分自身の身体の情報や周囲の情報（感覚刺激）を上手く整理して取り入れることが苦手で、混乱している方に対して、遊具や様々な感触を得られる玩具等を使用して、感覚情報を上手く整理して適応行動を引き起こすことを目的とした療法である。例えば、光や音に非常に過敏なため、過剰に反応し落ち着きをなくしてしまう子どもや、触覚が非常に過敏なため、物に触れない、人との接触を避けるような過剰な防衛反応を示す子ども、逆に触覚が鈍麻なために、ボタンや紐の感触がわかりにくく、上手くボタンをはめられない、靴ひもを結べないといった不器用な子ども。あるいは、高さやスピードに対して非常に鈍麻なため、高所のような危険な場所に行きたがったり、過剰に動き回る子どもなど、感覚刺激に対して過剰に過敏あるいは鈍麻なために、問題行動を引き起こしている子どもが少なくない。このような子どもに対して、遊具等を使用して遊びの中で楽しめる感覚を提供することにより、子どもの感覚情報処理機能の成熟を促し、苦手な部分を育てていくことを目的としたものがSIである。

6) 効果判定

子どもの特徴の評価：JSI-R

JSI-R：子どもに感覚刺激に受け取り方に偏りがある場合，その傾向が様々な行動に表れてくることがあります。JSI-Rは，このような行動の出現頻度を調査することで，子どもたちの感覚刺激の受け取り方の傾向を把握しようとするチェックリストです。前庭感覚 30 項目，触覚 44 項目，固有覚 11 項目，聴覚 15 項目，視覚 20 項目，嗅覚 5 項目，味覚 6 項目，その他 16 項目の 8 つの下位検査と 147 の質問項目から構成されている。結果は，「典型的な状態」，「若干の偏りの傾向が推測される状態」，「偏りの傾向が推測される状態」の 3 段階評価で解釈できるように作成されている。

活動の効果の評価：保護者へのアンケート調査

## 7) スタッフ

著者 1 名と研究協力者 3 名，学生ボランティア 5 名

## 3. 結果

### 1) JSI-R

表 2 に示すように，参加者全員に感覚刺激の受け取り方に偏りの傾向が推測される状態であった。

表 2 JSI-R の結果

	Green	Yellow	Red
前庭覚	1 名	4 名	3 名
触覚	1 名	4 名	3 名
固有覚	1 名	3 名	4 名
聴覚	0 名	3 名	5 名
視覚	2 名	3 名	4 名
嗅覚	5 名	3 名	0 名
味覚	2 名	5 名	1 名
その他	1 名	1 名	5 名
総合点	2 名	3 名	3 名

Green：典型的な状態，Yellow：若干の偏り推測される，Red：偏りが推測される

### 2) アンケート結果

#### ①参加してお子さんの様子はどうでしたか？

大変よかった	よかった	普通	あまりよくなかった	よくなかった
5 名	3 名	0 名	0 名	0 名

#### ②参加してご家族にとってはどうでしたか？

大変よかった	よかった	普通	あまりよくなかった	よくなかった
5 名	3 名	0 名	0 名	0 名

#### ③参加する前に，期待していたことは

- ・遊具で遊べること
- ・本人が楽しんで参加できれば
- ・初めての場所，人にどのくらい適応できるか心配で，今後の参考に様子をみたい
- ・楽しい時間が過ごせる場であってほしい
- ・親が安心して子どもを預けられる場であってほしい

上記の期待していたことは達成できましたか

達成できた	ほぼ達成できた	まあまあ達成できた	あまり達成できなかった	達成できなかった
7名	1名	0名	0名	0名

④お子さんの余暇支援活動など，どのようなサービスがあればいいと思いますか

- ・今回のように思い切り体を動かして遊べる場
- ・送迎から支援してくれるサービス
- ・きょうだいで同じ場所で見られるサービス
- ・プール活動を支援してくれるサービス
- ・気軽に参加できるといい
- ・子どもの適性を見出し，継続しての活動につながっていくような形があればいい
- ・公共の施設などは行きたくても行けないので，気にせず遊ばせてあげられる所

⑤また，このような活動があれば参加したいですか

参加したい 8名

#### 4. 考察・結論

今回参加した保護者からは，昨年実施した研究と同様に「公共の施設などに行きたいが，周囲が気になり行けない」，「身体を動かして遊べる場がほしい」というような希望が聞かれた．アンケート結果から今回の活動は昨年に引き続き，保護者の希望に沿った支援であったと考えられる．

さらに，今回の参加者全員に感覚刺激の受け取り方に偏りの傾向が推測される状態であった．特に，前庭覚，固有覚という身体を動かすことにより得られる感覚刺激に対する鈍麻が多く認められた．この結果から，前庭覚，固有覚が鈍麻な子どもたちは，その感覚ニーズを満たすために，多動等の落ち着きがなく，問題行動として，捉えられることが少なくない．そのため，普段の日常生活から，子どもたちの感覚ニーズを満たす遊びや場の提供が必要である．今回の試みは，遊具や粗大運動を取り入れた SI の実施により，子どもたちの感覚ニーズを満たす活動になったと考えられる．しかし，本来であれば，遊具を使用した遊びは公園等でできるが，保護者からの意見にもあったように，公共の場で遊ばせるのに躊躇している．そのため，今回のような支援により，気軽に周囲を気にせず子どもを遊ばせる場の提供が必要である．

今後も，発達障害の子どもたちが，気軽に遊べる，あるいは集うことができる場の提供を検討していくことが重要であると考えられる．